

翻訳：トマス・ハーデイ短編 『萎えし腕』(1)
 一身を落とした女の詛いの齎らせしもの

大野次征*

Translation: "The Withered Arm" in *Wessex Tales* by Thomas Hardy (1)
 — Curse of the Forsaken Wife, with a Devastating Result

Jisei OHNO

表題のイギリスの小説家(1840—1928)は、本高专主催の文部省公開講座において、一昨年は『テス』を昨年は『ウエセックス物語』より、下記の短編を「一般社会人のための英文小説講義」と銘うって夏休みを中心に隔週土曜日に全6回に亘って実施したものである。昨年も、真摯で熱心な社会人と共に全頁読み終えた。この際、翻訳という形で発表できたことは幸いである。本作品はハーデイの原題: 'The Withered Arm' で、時代を1818-1825に、場所をドーセット(ハーデイ名でウエセックス)に設定されているが、書かれたのは1888年、彼の48歳の作品である。定本としては、Thomas Hardy, 'The Withered Arm' in *Wessex Tales* (Oxford: Oxford University Press, 1991; revised ed. as an Oxford World's Classics paperback, 1998)を用いた。尚、本作品の翻訳は、筆者の知る限り世に出ていない。

萎えし腕

I 孤独な乳搾り女

ここは85頭もの牛を搾する酪農場である。乳搾り達が、常雇と臨時雇を問わず、仕事に没頭している。それも時期はまだ4月初旬とはいっても、牧草は、浅く水の張った牧場全体に生え、牛の乳は桶からあふれんばかりに出ているからだ。時は夕方6時頃、図体の大きく、赤みがかった寸胴の牛の7割方の乳搾りも済み、少しばかり話を入れる余裕も出てきた。

『あの男ね、明日嫁をつれて帰ってくるそうだよ。今日は、アングルベリー近くまで来ているそうさ。』

声は、「サクランボ」という牛の腹の下あたりから聞こえてくるが、声の主の乳搾り女の顔は大人しく立つ牛の脇の向こうで見えない。

『嫁の顔を見た者いるかね』相手の声。

最初の女が見ていないと、答えるが、さらに『赤い頬っぺのふっくらして可愛い娘だってさ』と言いながら、牛の尻尾の先の中庭に目をやった。そこには、年格好30位の痩せ移ろいかけた女が

他の女達とは少し離れて乳を搾っている。

『嫁の方は大分若いて言うが』と、2番目の女。

この女も反射的に同じ方向に目をやった。

『それで、男の方は、歳はいくつかね。』

『30か、そこらだ。』

『40と、いいいかもね』と、近くで搾っていた年寄りの男が割り込んできた。長く白い「ウオッパー」という前掛けをつけている。帽子の縁を下向きに縛っているので一見女に見える。『あの人は大堰のできぬ前の生まれだ。わしが、あそこまで水汲みに行っていた頃でな、まだ独り前に駄賃をもらえなかった。』

話に夢中になった余り、乳の出方が乱れてきた。とうとう、別の牛の腹の方から親方らしい声が聞こえてきた。『おい、おい。ロッジ旦那の歳やら、嫁の歳のことは、こっちには、何も関係ないだろう！わしは、あの人に年9ポンド、牛の代金を払わにゃならん。歳には何の関係もなくだ。さっさと仕事してくれ。搾り終えぬうちに、暗くなっちゃう。ほら、日も暮れかかってきたで。』この声は、酪農主本人である。乳搾り人夫たちを雇っている

のだ。

その後は、地主のロッジの結婚話しも声を上げて大っぴらにする者はいなくなったが、最初に喋り出した女が、牛の下から隣で搾っている女にひそひそ声で、『あの女には辛い話だね。』前に述べた痩せ細った女のことだ。

『そりゃ、ないよ』2番目の女。『旦那も、あのローダ・ブルックと、言葉も交わさなくなって何年にもなるし。』

乳搾りがすむと、搾り桶を洗い、それを引っ掛けのついた台に掛ける。引っ掛け台は、普通は、樫の大枝の皮を剥いて作り、地面に真直ぐ据え付けておく。巨大な鹿角に似ている。やがて、殆どの人夫達は、三々五々と家路に向かった。一度も口を開かなかった痩せ柄の女も、12かそこの年格好の男の子と連れ立ち上の畑を2人で帰って行った。

2人の帰り道は他の者たちとは、隔たっており牧場よりずっと高台の人里離れた方角だ。エグドンの荒野の端からそれほど離れていない。家に近付くにつれ遠くにヒースの丘の黒い輪郭が姿を現わした。

『今、あの人たちが下の農園で話していたんだけど、お父さんが若いお嫁さんを連れて明日、アングルベリーから帰って来るんだって。お前、市場まで買い物に行ってね、きっと、会えるよ。』

『わかった、母さん。それじゃ、お父さん結婚したの』、と少年。

『そう、お前ね、その女に会えるからね。会ったら、どんな女か教えておくれ。』

『うん。』

『色が黒いか、白いか、背が高いのか、私くらいなのか。生活の為に働いていたのか、それとも羽振りがよく仕事はしていないかった様子か。私の勘では、育ちがいいと、思うけど。』

『わかった。』

二人は黄昏のなかを、丘を這うようにのぼっていき、小さな家に入って行った。家の造りは、泥壁である。その表面は幾度となく雨に打たれ、溝や窪みができ、元の滑らかな部分は全く残っていなかった。一方、屋根の上の草薺きのあちこちか

らは垂木が現れ、皮膚を突き破って出た骨といった感じだ。

女は炉の隅にひざまずくと、2塊（かたまり）の燃料泥炭の間にヘザーの枯れ芝を入れてその前で、赤い燠に息を吹き掛ける。やがて、泥炭が燃え出した。赤い炎の輝きは女の青白い頬にも灯を点した。かつて美しかった黒い瞳が新たに蘇ったかに見えた。『いいね』と、また言い出す。『その女が色が黒いか、白いか見ておいで。できたら、手が白いかも注意してね。白くなかったなら、家事をしている手か、私みたいに乳搾りで荒れた手か見ておいで。』

少年の返事も今度は、生返事だった。小刀でブナ張り椅子に刻み目を入れていたが母親は、気付いていない。

II 花嫁

アングルベリーからホルムストークまでの道はほぼ平坦である。しかし、1ヶ所だけ急な坂道がその単調を破っている。アングルベリーの市場町からの帰りの農家の者達は道中ずっと馬を走らせるが、この短い上り坂は馬を歩かせる。

次の夕方、日もまだ明るい頃、洒落た新車のギグ（1頭立て2輪馬車）がレモン色の車体に赤の車輪をあしらい、元気のいい馬に引かれ平坦な街道を西に向かって疾駆して来た。御者をつとめるのは男盛りの小地主である。髯は役者さながらに奇麗に剃っている。顔は町での取り引きに成功して帰路につく時の篤農家の晴れやかな顔で、それが一層引き立つのは例の青みがかった朱色の頬が風格をもたせるからだ。横には女性が座っている。歳は何歳も若い、まだ、あどけない娘といったところだ。女の顔色は、生き生きとしているが、どことなく独特な、柔和で華奢、薔薇の花びらのさんざめくなかで、その下に置かれた灯火のようである。

この道を旅する者は少ない。本道ではないからだ。長い白帯のように延びた砂利道には人影もない。ただ、一つ小さく動きの鈍い粒のようなものが見える。その粒は、やがて、少年の姿となった。

蝸牛が這うようにのろいが、絶えず後ろを振り返っている。身につけた重そうな荷物が歩行の鈍さの理由ではないとしても、言い訳にはなっている。

威勢よく弾むギグ車は、前述の上り坂の下に来るとスピードを落としたが、今は、歩行者も僅か数ヤード先の所にいた。大きな荷物を片手が臀部で支え、振り返り地主の妻から視線を逸らさない。馬と平行に歩きながら女の姿をすっかり頭の中に憶え込もうとしているようだ。

落日が、女の顔全体に当たると顔の表情や、色合い、可愛い小鼻の丸みから瞳の色にいたるまでその輪郭が如実に姿を現した。地主は、男の子のしぶとく付きまとうのに迷惑な顔を見せてはいるが『どけ』は言わない。そのまま、若者は馬車の前を進みながら鋭い視線を女から逸らすことを豪もしない。やがて、坂の上まで来ると地主は安堵の表情を浮かべ馬を速足にした。少年に気付いた素振りも見せなかった。

『可哀想に、あの子ジッと私を見ていたわ』、新婚の妻。

『ああ、そうだね。見られていたのは分かってた。』

『あの子、村の子でしょうね。』

『そう。1、2 マイル先で母親と暮らしているんじゃないかたかな。』

『私達のことは知っているのでしょうかね、きっと。』

『そうだ。初めのうちは、皆にじろじろ見られるよ。ゲアトルド。』

『分かりました。でも、可哀想にあの男の子珍しさからより、重い荷物を載せてくれるのを待って、こっちを見ていたって思うんだけど。』

『違うね』と、夫は即座に答える。『ここの田舎の男の子は背中に担ぎ上げたら目方100も平気さ。それに重さも、そうだが、大きな荷物だったな。さてと、ところで、後1マイルもすれば遠くに我が家が見えてくるから教えてあげよう。そこに行くまでに暗くならないといいが。』車輪はふる回転で回り始めると、以前のように小石を辺に撥ねて前進して行ったが、やがてかなり大きな白い屋敷が現れてきた。その奥には幾つかの農業用倉

庫や覆いの被った干草の山が見える。

一方、少年は、足を速めその白い屋敷より1.5マイルばかり手前から脇道に入り瘦せた牧草地の方に上ってみると、かなり先の母の待つ家に向かった。

母親は、酪農場の他の者より離れたところで昼間乳搾りを終えた後、家に帰っていた。暮れかかった玄関口でキャベツ洗いをしている。

『ほら、その網を一寸持っていて』お帰りの言葉もかけずにいきなり少年に、頼んだ。

荷物を投げ出すとキャベツ網の端を持った。母親はその網に水のしたたるキャベツの葉をつめこみながら、続けて言った『ところで、見てきたの。』

『もちろん、ちゃんとね。』

『品のある人だった?』

『うん、大あり。お姫さまみたいだった。』

『歳は、若かった?』

『ええと、もう大人だった。何か様子も全然おとなの女の人。』

『当たり前さ。髪の色は、どう。それに、顔は?』

『髪の毛はちょっと薄い色で、顔はお人形さんみたいにきれいだった。』

『それじゃ髪は私みたいに黒くなかったのかい。』

『うん、青っぽい色だったかな。唇が、いい具合に赤くて、笑うと白い歯が見えた。』

『背丈はあった?』と、無愛想になった。

『分からない、座っていたからね。』

『じゃ、明日の朝はホームストーク教会に必ず行くんだよ。きっと来るはずだから。早く行って、その女が入って来るのをよーく見てきなさい。それで、帰って、母さんより背が高いか教えておくれ。』

『うん分かった。でも、母さん自分で行ってみてもいいでしょう?』

『私が?今しがた、窓の向こうを通っていたって目もくれないよ。あの女ロッジと一緒にいたよね、勿論。何か言われたかい?』

『いつも通り、何んにも。』

『知らんふりされたのかい。』

『うん。』

翌日、母は息子に真新しいシャツを着せホームストーク教会に送り出した。少年は、教会の古臭く狭い建物に着くと扉が開くところだったので真っ先に入れた。洗礼盤の傍の席に座ると、信徒たちが、ぞろぞろ入ってくるのを見ていた。金持ちの地主ロッジは最後の方に入って来た。一緒に妻は、初対面で遠慮がちな女性に見られる恥ずかしさをあらわに通路をやって来た。皆の視線が一斉にその女に釘づけになったため、少年は気づかれずに済んだ。

帰宅すると、母は家に入らぬうちに『どうだった』と、聞いた。

『背は高くなかった。低い方だったよ。』

『あ〜ら』と、母親は満足げである。

『でも、とってもきれいだった。とっても。と言うか、かわいい人だよ。』

地主の花嫁の若くみずみずしい姿は、この少しひねくれた少年の目にもすっかり好印象を与えていた。

『もう十分』さらに早口に『さあ、食卓にクロスを敷いて。お前が仕掛けで捕ってくれた兎の肉、柔くておいしいよ。でも、いいね、誰もお前を捕まえたりはしないからね。あ、まだ、あの女がどんな手をしてたか話していないよ。』

『見えなかった。手袋を外さなかったもの。』

『今朝、服は何着ていたかい。』

『白のボンネットに銀色の服。その服がベンチに触れるとしゅしゅと大きな音をたてるから、その人恥ずかしがって赤くなった。それで、触れないように内側にたくし込んだんだ。でも、ベンチに腰をおろす時、またずっと大きな音がした。ロッジさんが嬉しそうだったよ。でも、あの人もチョッキが突き出ていた。それから、印章入れが、領主さまのものみたいに大きいのが外に垂れ下がっていた。ね、女の人ね、やっぱり音の出る服は絶対着ないと決めているみたい。』

『そうだろう。でも、もう十分。』

このように少年は母親から新婚夫婦の話を頼まれると、時々話してあげることが続いた。ちょっとしたものでも。ローダ・ブルックは新婦のロッジに会うには、2、3 マイル歩いて行けば済むこ

とだが、お屋敷の方に足を向けようとしなかった。そればかりか、ロッジの第2農場に隣接する酪農場での毎日の乳搾り作業でも、近頃の結婚話に口出しすることもなかった。ロッジから牛を借り受けている経営者はこの大柄の乳搾り女の過去については知り尽くしていた、だからこのローダを傷つけないため、職場で話しが持ち上がらないよう努めたのは、彼の男意気からであった。とは言え、ロッジの嫁が来て数日はその話で持ち切りである。ローダ・ブルックは息子の話しやら、乳搾り仲間の口からふと漏れたことから無意識のうちにロッジの花嫁のイメージが写真のように生なましく心に描き出せる程になった。

Ⅲ 夢

新婚夫婦が、村に帰ってから2、3週間たった夜、息子が床に就くと、ローダは泥炭の火が消えるまで灰燼の前に身をかがめて座っていた。燠（おき）に目は向いていても、嫁のことが頭から離れない。そのうちに時の経つのも忘れていた。だが、とうとう一日の仕事の疲れもあって床に就いた。

だが、数日前からその夜までずっと心はその女の姿がついてまわり夜も離れない。はじめて夢の中にガートルード・ロッジがこの妻の座を奪われた女を訪ねて来た。ローダ・ブルックは夢を見た。本人は寝入る前に本当に姿があらわれたというが、あの若い花嫁は、薄色のシルクのドレスと白ボンネットを身につけ、顔の形相たるや、ひどく歪み、齢を重ねた者のように皺深い姿で、眠っている女の胸の上に座っている。ロッジの妻の重さが徐々に加わり、青い目は意地悪そうに顔を覗き込んでいる。すると、今度は、からかうように左手を突き出すと、付けている結婚指輪がローダの目にキラッと光った。頭が混乱し、その上、体重の重みに息がつかると、眠っている女はもがき苦しんだ。夢の中で女は、支柱の方に引き下がりはしたが、視線をそらさない。また、少しづつ前に出てきて、胸の上に座り前のように左手を出して見せた。

息苦しさに喘ぎながら、ローダは最後の力を振絞る、右手を振り回し、彼女に向かって幽霊が突き

出した左手を掴んだ。その手を振り回すと、後ろの床の上に転がって行った。低いうめき声を上げて、上体をはっと起こした。

『まあ、とんでもない』と、冷や汗をかきながら大声を出すと自身は、ベッドの端に座っていた。

『夢じゃない—確かに、ここにいたわ』

今も敵の腕を掴んでいる感触を覚えている—その肉と骨の感触は紛れもないと、思った。その幽霊はと、投げ捨てた床の上に目を向けたが何も見えなかった。ローダ・ブルックは、その晩はもう眠れなかった。翌朝夜明けに乳搾りに行くと、皆は彼女の顔が蒼白でげっそりやつれているのを知った。絞り出す乳の勢いは弱く、揺れながら桶に落ちていく。手もとは、今も落ち着きが戻らない。まだ昨夜の感触が抜けないのだ。朝食を食べに帰ったが、夕食時のように疲労困憊していた。

『昨日の晩、お母さん部屋でうめいていたけど、どうしたの』、と息子。『きっとベッドから落ちこちたんでしょ。』

『お前何か落ちる音が聞こえたのかい。何時頃だった？』

『ちょうど時計が2時を打ってた。』

説明しようがなかった。朝食を済ますと黙って家事に取りかかった。少年も手伝ってくれた。農場の野良仕事に出るのが嫌だったのだ。母親も息子の嫌がるのを咎め立てはしなかった。11時から12時にかけて、庭の門がカタツとなった。目を窓に向けると、庭の隅の門の内に昨夜夢に見た女が立っている。ローダの目は釘づけになった。

『あー、うちに来るって言ってた』と、少年は声を上げて自らも、その女をみた。

『そう言ってたって—いつ？ どうしてうちのことを知っているんだい？』

『会った時、僕の方から話しかけたんだ。昨日、話したんだよ。』

『言ったでしょう。』母親は怒って顔を赤くした。

『あの屋敷の者とは誰とも話してはいはいけないって。近くに行くこともいけないの。』

『僕からは、話しかけなかったよ。あの人が話しかけて来たんだもん。お屋敷に行ったのでもないよ、道で会ったんだ。』

『何て言ったの？』

『何も。あの人が聞いてきたんだ。「あなたでしょう。市場から重たい荷物をずっとおぶっていたかわいそうな子は？」それから、僕の靴を見てこう言った、「雨が続いたら足を濡らさないでいるのは無理だわね。大きいひびがはいっているもの。」僕はこういったよ、「母と二人で暮らしていて大変だから、こんな格好です」て。そしたら、「あなたのお家に行って、もっといいお靴を上げるわね。お母さんにも会いましょう。」あの人ね、うちだけでなく、酪農場の人たちにも品物を分けてくれるんだよ。』

ロッジの妻はもう戸口の近くに来ていた。ローダが、夢の時のようにシルクは着ていなかったが、モーニングハットを被り、普通に軽い生地 of 衣服を着ていた。そのほうがシルクより似合っ見える。腕には、籠を提げている。

昨夜の夢の印象が、強烈に焼き付いていた。ブルックは、この訪問者の顔の皺や、軽蔑と残忍な表情が今にも出てくるぞ、と思った。出来ることなら、会うのを避けたかった。だが、家には勝手口はなかった。それにすぐに、息子がロッジ夫人のノックに応じて門を開けてしまった。

『やっぱり、このお家だったわね』と、若者の顔を見て微笑んだ。『でもあなたが、お玄関を開けてくれるまでは、どうかなって思ったわ。』

姿形に素振りまで夢に出て来た女だ。ただ、声は得も言われぬほどきれいで、ちらと見る目は魅力がある。微笑みは優しく、ローダが昨夜夢に見た女とは大違いである。今、五感で目撃している人物を信じがたいと思わざるを得ない。ひどい嫌悪に駆られ逃げ隠れしようとしたが、そうしなくてよかった。籠の中にロッジ夫人は、約束の靴や有り難い品物を幾つか入れて来た。

自分と子に対する優しい心根を目の当たりにしてローダは、わが心を痛く責めさいなんだ。この邪気一つない若い女性は、祝福は受けても呪を受けることはない。彼女が去ってしまうと家の中は火が消えてしまったようだ。2日たつと、靴の履き心地はどうかと、尋ねて来た。それから、2週間後に、また、ローダを訪ねて来た。今度は、少年は

家にいなかった。

『歩き応えがありますね』と、ロッジの若妻、『お宅は、教区から少し離れているから。ところで、お元気ですか。気分があまり優れないようだけど。』

ローダは、まずまずだと、答えた。実際、色艶こそ劣っても、輪郭の整った顔だちと大柄の体格の女は、瓜実（うりぎね）顔のこの女性に較べれば体に自信はあった。二人の話は、お互いの長所短所といった立ち上がったところまでも弾んだが、ロッジの妻が帰る段になると、ローダは、『こちらの水が体に合うといいですね。沼の湿気が体に障らないと。』

若い女は答えて、合いますとも、体は概ね健康にできていますから、と言った。『でも、それで思い出したのですが』と、付け加え、『少し分からない病気を抱えているんです。大したことではないんだけど、でも、どうも府に落ちないの。』

左の手を腕まで袖をまくって見せた。その手にローダの視線は吸い込まれた。夢の中で、自ら掴んだものと寸ぶん違わぬ物だった。ピンク色の脹（ふく）よかな腕に微かな色艶の悪い跡は、乱暴に掴まれた跡に見える。ローダの目は、その痣（あざ）に釘付けになった。痣の中に己の4本の指の跡があるように見えたからだ。

『これは？』表情を悟られないように尋ねた。

『分からないの』と、ロッジの妻は、首を横に振りながら、『夜、ぐっすり眠っていたら、夢を見てどこか覚えのないところでいて、そこで、急に腕に痛みが走ったのだけど、痛くて目が覚めたの。昼間、何かにぶつかったのでしょうか。でも、覚えがないんですよ』笑いながら、『主人に言いましょ。あなたが、怒って、ここを殴ったみたい、て。ええ、そのうちにひいてしまうでしょ。』

『は、は。そうですね。でも、いつ頃のことです？』

ロッジの妻は、懸命になって、思い出すと、2週間前の朝方だと思うけど、と言った。『目が覚めても、どこにいるのか、思い出さなくて。2時を打つ時計の音で、家だとを分かったわ』と、付け加えた。

同じ曜日の夜であること、更に、ローダが幽霊に会った、同じ時刻まで合っている。ブルックは、自分は後ろめたい気がしているのに、彼女は素直に何も包み隠さず話してくれたのに驚いた。だが、自分も、偶々、同じ時間に、同じ夢を見たとは、切り出せなかったが、あの恐ろしい夜の出来事の一部始終が倍にもなって鮮やかに思い出された。

『そんなことがあるだろうか』と、訪問客が、帰った後、独り言を言った。『呪いがかかってしまった、本心でないのに。』女は、屋敷を出された後、自分が魔女と噂が立っているのは、知っていた。だが、特にそんな汚名をかけられる謂れに納得できず、聞き流していた。だが、これで合点が行くではないか。そんなことが、前にもあったのかも知れない。

IV 提案

夏も真近。ローダ・ブルックは、かの若妻に対して好感に近い気持ちを抱いていたが、反面、会うのが恐かった。あの性格のどこかにローダは罪の意識に苦しむことになると思った。ところが、運命の力は、毎日の仕事以外、家を出るとローダの足をホームストークに向けさせる時がある。そんな訳で、二人が次に出会ったのは戸外であった。ローダは、奇怪なあの話題に触れずにはおれなかった。そこで、挨拶の後、口籠りながらも切り出した、『あなたの、え、腕の傷は治りましたか。』ところが、ゲートルード・ロッジの左腕の動きがままならぬことがわかりすっかり仰天した。

『いいえ、余りよくないんです。というより、全然よくなるらないの。むしろ、ひどくなったわ。時々、ひどい痛みもあって。』

『お医者に見てもらったが、いいですよ。』

もう見てもらった、との返事。夫が、医者に行けと言ってきかなかったとのこと。医者の方は、患部の原因が全くつかめないらしい。ただ、熱めの湯につけるように言われた。そこで、湯につけているものの治療の利き目がない。

『見せてもらっていいですか』と、乳搾り女。

ロッジの妻は、袖をまくり上げると、そこを見

せた。手首の5、6センチ上のところだ。ローダ・ブルックは、見ると、落ち着いていられた。怪我の跡のようなものではなく、そこが萎んで皺が寄っている案配だ。4本の指の跡は前より一段とはっきり見える。それに、夢中で掴んだあの場所に跡ができてるように見えた。ゲアトルードの手首から、肘の方へ掴んだ時の自分の人さし指、中指の順に小指の跡が残っている。

二人がこの前会った後、ゲアトルード本人にも何の跡か分かったらしく、『これ何か指の跡みたい』と言い、元気に笑って『主人がね、魔女か悪魔が、お前の腕を掴まえて肉を削ぎ取って、しなびさせてしまったのでは、と言うのよ。』

ローダは、身が震えた。『それは、思い過ごしですよ。私なら、気にしないわ』と、早口に言った。

年下の女は、戸惑いながら『わたしも気に留めないようにしたいけど、これで夫にきらわ…、いえ、愛が冷えたりしなければいいけど。男って見かけをとてにも気にするでしょう。』

『中にはいますね一旦那さんなんかは。』

『そうなの。主人、とても私のこと自慢してくれていました。初めのうちはだけど。』

『腕を隠して見えなくしたら。』

『でも—ここに醜いものがあるって主人の頭にあるでしょう。』目にたまった涙を必死に隠そうとした。

『ねえ、奥さん。じき、消えて治ってしまうようお祈りしています。』

家に帰る途中も、乳搾り女の胸中は、改めて、今聞いた話しに恐ろしい呪縛にかかった気がした。

悪しき行為に対する罪悪感は、たかが迷信と一笑に付そうだが、益々募ってくるばかりである。人には言えぬ胸の奥で、後釜に座った女の美貌を、なり振り構わず、痛め付けたい気持ちがないと、言えば嘘になる。ただ、その女に肉体的苦痛を嘗めさせるのには忍びなかった。勿論、ロッジから過去にされた仕打ちは、修復不可能であったが、それとは知らず妻となった女性には遺恨らしきものは、一切この年増女の気持から無くなっていた。

美貌と優しさのゲアトルードが、夢のことを知ったら、どう思うだろう。それを伏せておくのは、

友情への裏切り行為のように思えたが、進んで言い出すことも、また、その折衷案も思い付かなかった。

女は、その夜遅くまで、考え込んだ。翌日、昼前の乳搾りの後、とり憑かれたように、ゲアトルード・ロッジに出来るなら、また、一目会おうと出かけた。屋敷の方を遠くから注意していたが、やがて独り馬に乗ってくる地主の妻を認めた一恐らく、少し遠くの農場にいる夫を迎えにでも行くつもりであろう。すると、ロッジの妻が、気がつき馬を走らせて来た。

『ローダさん、お早うございます』ゲアトルードは、近寄ると言った。『お訪ねしようと思ったのよ。』

ロッジの妻は、手綱をやっと持っている。

『良くなっていけばって思っ—悪い方の腕が』と、ローダ。

『皆の話しだと、原因を知る手立ては一つだろうって、それで何とか治療の施しようもあるって』と、相手の女が不安そうに言った。『エグドンの荒野の奥に、何でも賢い人がいて、そこに行けば。でも、まだ生きておられるか分からないそうですが、いま宙には名前を思い出せないんだけど。あなたなら、その人を一番知っていて、相手が相談に乗ってくれるか、あなたに聞けば分かるっていうものだから。』

『祈祷師のトレンドルさんのことではないでしょうか』と、瘦せぎすの女は、蒼白になって言った。

『トレンドル、ああ、そう。まだ、お元気かしら。』

『そうだと思いますよ』ローダは、仕方なく言った。

『どうして祈祷師と言われているの?』

『だって、みんな言ってますよ、いや、言ってきました。祈祷…、普通の人にはない能力を持っているって。』

『あ～あ、どうしてうちの家族は、そんな人を薦めるのかしら。余程、迷信家なんだから。どこかのお医者様のことかと思っていたのに。もう、よしましょう。』

ローダは、それを聞いてほっとした様子である。ロッジの妻も帰って行くと、乳搾り女は、この祈祷師の紹介に自分の名前が上がったんだと、内心思った。その時、酪農場では皮肉なことに、蛇の道はへび、つまり、祈祷師の場所は魔術師が知っているという噂が行き交っていた。それに、どうも怪しい女と、思われている。少し前までは、こんなことは、常識家のローダには、少しも意に介さなかった。だが、今は御幣を担がれるのが気になってしょうがない。ふいに恐ろしくなることがある。この祈祷師トレンドルが自分の名を挙げて、ゲアトルドの美貌に呪いを掛け魔術を使って手を萎縮させていると、言ったら、この友人に憎まれ、それどころか人間の仮面を被った悪魔と呼ばれかねない。

だが、今の所は、全ておしまいという訳でもない。その2日後、一つの影がローダ・ブルックの家の床の上に、陽に映された窓枠の影の中に現れた。と、突然、息をきらした様子で、かの女性が戸を開けた。

『おひとり？』と、ゲアトルド。ブルック本人よりも悩み苦しんでいる表情である。

『そうです』と、ローダ。

『この腕がひどくなってきたみたいで、困って

いるの』と、地主の妻。更に続けて『これ不思議でしょうがないの。不治の病にならないといいのだけど。祈祷師トレンドルさんのこと、考え直しているの。本当は信じていないけど、損はしない話だし、会ってみるだけなら構わないわ。ただ、夫にだけは知られたら困まるけど。遠いのかしら。』

『ええ、5マイルはありますよ』と、ローダは後退りしながら『エグドンの奥の方。』

『それなら、歩いて行くことになるわ。一緒に行って案内してもらえないかしら。そうね、明日の午後どうです？』

『エッ、駄目です、あの一』と、乳搾り女はうろたえ口籠った。再度、恐怖に襲われた。夢の中で自分がした悪辣な行為が暴露され、今までにない最良の友の面前でわが人間性を無惨に打ちのめされたら、と。だが、このロッジの妻にせがまれ、ローダは、不安に苛まれながらも同意してしまった。道中は楽しいものではない、かといって、雇い主の妻がかかっている難病が治療できるかもしれないのにむげに撥ね付けることなどできない。二人はこの謎めいた目的を人に悟られないように荒野の外れの今いるところから見える植林地の角で待ち合わせることにした。